

他の契機によっても規定されている。たとえば市場が拡大すると、すなわち交換の範囲が拡大すると、生産はその規模を増大し、またいつそう深く分業がすすむ。分配の変化とともに生産も変化する。たとえば資本の集積、人口の都市と農村へのさまざまな分配などとともに。最後に、消費の欲求が生産を規定する。さまざまな契機のあいだで相互作用が生じる。こうしたことは、どんな有機的全体の場合にも起ることである。(Marx, 1973, pp. 99-100)

マルクスの「生産の反定立的定義」と「その不均衡な形態」における生産という考えは、特にもっとも初期の単純な社会的組織の形式に適用されるとき、生産の二重的なあり方、つまり図2・6の活動システム全体でもあり、同時にいちばん上の小三角形、つまりシステムの行為タイプでもあるという二重性に触れていると思われる。

リーキーとレヴィンの述べた原始的な採集狩猟人について考えてみよう。彼らの生活における活動全体は、広義の生産と呼べるだろう。他方、彼らはある一定の時間だけ採集と狩猟に費やした——これは狭義の生産と呼べるだろう。生産された食物の共有は、明確に彼らの日常生活の一部であった——これは分配と呼べる。食物の分け前を獲得した後、彼らはそれを食べる——消費である。最後に、多様な形態の社会的相互作用——交換——に使われる「かなりの余暇時間」(Leakey & Lewin, 1983, p. 126)があった。

言いかえれば、図2・6のそれぞれの小三角形は、潜在的にそれ自身活動なのである。社会全体の活動の内部において、小三角形は、最初は行為であるにすぎない。というのも、その対象はまだ比較

的分化していない全体（主に食物）であり、時間的・空間的・社会的境界も定まっていけないからである。リーキーとレヴィン（1983, p. 109）が指摘しているように、「生活領域と、仕事、領域は区別されていない」し、「採集・狩猟人の共同体に専門家はいない」。しかしながら、狩猟のような難しい課題は、非常に早くから分業をもたらし、本章で先にあげたレオンチェフの狩猟の例に示されるように、相対的に独立した活動になっていく。

より複雑で分化した社会では、すべての小三角形についてそれを具体化するような、相対的に独立した活動が多数存在する。しかし、そのような相対的に独立した活動システムの内部にも、図2・6に描かれているのと同じの内的構造が見いだされるのである。こうして、全体的な社会的活動のなかでたとえば交換を表している活動（たとえば、余暇に行われる趣味の活動）も、その内部に、生産、分配、交換、消費の小三角形を含んでいる。ここで重要なのは、つまり生産の要素のない活動は存在しないということである。生産のないのは行為だけであろう。

人間の生産の特殊性は、生産しようとするものの単純な再生産以上のものを引き出すところにある。「以上」ということのひとつは、先にリーキーとレヴィンやルービンによって論じられた、共有と社会性をもたらす余剰生産物である。もうひとつは、生産過程のために、生産過程の内部でつくりだされるツールと道具である。

労働過程は、同一過程のたんなる反復ではなく、変化した条件——生産課題それ自身が創造し拡張した条件——にもとづく反復であり新しいものでありえる。(…)人間の労働過程の特殊性についていえば、

以上のことは、それが拡張されていく傾向をもつ再生産過程であるということの意味している。  
(Damerow, Furth, Heidman & Lefevre, 1980, p. 238)

複雑な社会において、「生産の反定立的定義」とは、生産活動が、(1) 社会の全体的な活動の形式、および、(2) 同じ社会内の特殊な生産活動の形式、の両方で同時に存在するということを指している。ダメロウら (Damerow, Furth, Heidman & Lefevre, 1980, p. 241) は、前者を「具体的な一般的な労働」、後者を「具体的な特殊な労働」と呼んでいる。

さてここで、図2・6のモデルを、先に本章で論じた、人間活動の基礎モデルの四つの規準と比較してみよう。

第一に、このモデルは、あらゆる人間活動がもつ本質的な統一性と統合的な質をもっている最小でもっとも単純な単位であるということである。図2・1から図2・5までのもつと単純なモデルは、単純化しすぎか、発生的に初期の活動を表していることがわかる。こうした単純化は、人間活動のあらゆる側面を焦点化したり抽象したりするためになされるなら、当然役立つだろう。しかしながら、還元が歪曲化にならないよう、注意深くなければならない。

第二に、このモデルを援用すれば、内的なダイナミクスや歴史的变化において活動を分析することが可能になる。しかしながら、そのことは、具体的な活動の発展の分析にこのモデルを使いながら、あるいは修正しながら実証されねばならない。本章では、学習の文化的進化が、そうした発展の問題として役立つだろう。第3章と第4章では、活動の発展の歴史的事例を三つ分析するが、その分析を

行う前に、人間活動のダイナミクスと発展の源泉として、内的矛盾の概念を導入しなければならない。なお、第三と第四の規準（文脈的・生徳的現象としての活動、媒介された現象としての活動）については、図2・6のモデルの位置づけはもはや自明だろう。

## 6 人間活動の内的矛盾

人間活動のもつ基本的な内的矛盾は、それが全体的な社会的生産でもあり、かつ多くのなかのひとつの特殊な生産でもあるという二重性にある。このことは、どんな特殊な生産でも、全体的な社会的生産から独立したものであると同時に、必ずそれに従属したものであるということの意味する(Damerow, Furth, Heidmann & Lefevre, 1980, p. 240-241)。どんな特殊な生産活動の構造の内部でも、個人の行為と全体的な活動システムとのあいだの衝突として不断に矛盾が生み出される。この根本的な矛盾は、それぞれの社会経済体制で異なる歴史的形態をとる。

根本的な矛盾は、分業から生じる。

社会における分業と、それに対応して個人が特定の職掌に置かれることは、(…) 対極的な出発点から発展する。ひとつの家族のなかで、さらに(…) ひとつの種族のなかで、性別や年齢の相違によって、つまり純粹に生理的な差異を基礎にして、自然発生的に分業が発生し、それは、共同体の拡大や人口の

増加につれて、またとりわけ異種族間の紛争やある種族による他種族の征服によって、ますます拡大する。他方、(…)生産物の交換は、いろいろな家族や種族や共同体が接触する地点で発生する。なぜなら、文化の初期には独立者として相對するのは個人でなく家族や種族などだからである。共同体が違えば、それらが自然環境のなかに見いだす生産手段や生活手段も違っている。したがって、それらの共同体の生産様式や生活様式や生産物も違っている。いろいろな共同体が接触するときに相互の生産物交換を呼び起こすのはこの自然発生的な相違であつて、このような生産物がだんだん商品に転化する契機となる。交換は、生産局面の相違をつくりだすのではなく、すでに違っているさまざま生産局面を関連させ、それらをひとつの拡大された社会の多少とも互いに依存し合う部門にするのである。この場合に社会的分業が発生するのは、もともと違つていて独立している生産局面のあいだの交換によつてである。前者の場合、つまり生理学的分業が出发点となる場合には、コンパクトな全体の特定の機関、とりわけ他の共同体との商品交換にかかわる機関のまとまりが弱まり、離れ、独立のものとなつていくが、そこで未だ多種の仕事をつらひつけている唯一のものは、商品としての生産物の交換である。一方の場合には以前独立していたものが依存的になり、他方の場合には以前依存していたものの独立化が行われる。(Marx, 1909, pp. 344-345)

二つの方向、つまりひとつの活動の内側から、と二つの活動のあいだからの「対極的な出发点」は、拡張という新たな概念にとつて欠かせない。このことは、第3章で明らかになるだろう。ここでは、独立と従属のあいだの弁証法に焦点をあわせよう。

前資本主義的な社会経済体制においては、基本的な矛盾——個人の生産者が生産の全体的システムに従属すること——は、奴隷所有者によるのであれ、封建領主によるのであれ、直接目に見えるかたちでの、力による個人の抑圧の形態をとる。

社会的な力をもつことが少なければ少ないほど、つまり交換手段が未だに直接的な労働生産物の性質や交換者の直接的必要とかかわりあつていなければならないほど、人々を結びつける共同体——家父長的関係、古代の共同体、封建制度、ギルド制度——の力は、それだけ大きいにちがいない（……）。個人的な依存関係（最初はまったく自然発生的である）は最初の社会的形態であるが、この形態においては人間の生産性は狭い範囲においてしか、また孤立した地点においてしか展開されない。（Marx, 1973, pp. 157-158）

資本主義にあつては、矛盾は商品という一般的形態をとる。商品とは、価値をもつ対象（すなわち交換価値）のことであり、使用価値が唯一でも主だというわけでもない。商品の価値は、基本的に、その生産に要した社会的労働の平均的必要量によつて決定される。このことは、「あらゆる現象を、労働一般すなわち質的差異を欠いた労働に還元すること」を意味する。

およそ使用されるものが商品になるのは、それらが互いに独立に営まれる私的労働の生産物であるからにはかならない。（……）生産者は自分たちの労働生産物の交換を通じてはじめて社会的に接触するようになるのだから、彼らの私的労働の独自の社会的性格もまたこの交換においてはじめて現れる。（……）労

働生産物は、交換においてはじめてその使用されるものとしての多様な存在形態から切り離されて、社会的に同一の地位を、価値として受け取るのである。このような、有用物と価値物への労働生産物の分裂は、交換がすでに十分な広がり、重要性をもつようになり、したがってその価値としての性格が前もって生産の過程でも考慮されるようになったときに、はじめて実際的に重要になる。この瞬間から、個々の生産者の労働は社会的に二重の性格をもつようになる。それは、一方で、一定の有用労働として一定の社会的必要 (social want) を満たさなければならず、それによって、みずから集団的労働の一部品として、社会的分業の自然的発生の体制の一分岐として位置づけなければならない。他方で、私的労働がその生産者たちのさまざまな欲望を満足させるのは、あらゆる種類の有用な私的労働の相互交換可能性が社会的事実として確立され、その結果、別の種類の有用な私的労働と同等と認められるときだけである。(Marx, 1909, p. 44)

資本主義にあつては、あらゆるものごと・活動・関係に、商品の二重性格が浸透する。それらは商品化されるのである。個人の行為と集団の活動のあいだの関係、特殊な生産と全体的な生産のあいだの関係は、それぞれ変形を受ける。

相互に無関心な人々の相互的・全面的な依存性が、彼らの社会的連関を形成する。この社会的きずなは交換価値、というかたちで表現され、人々にとって、その活動または生産物は、交換価値というかたちではじめてそれぞれにとつての活動または生産物となる。人々は一般的な生産物、交換価値、すなわち

それ自身で孤立していて個体化された価値である貨幣を生産しなければならない。他方では、ある人が他の人々の活動の上に、または社会的富の上に及ぼす力は、交換価値、つまり貨幣の所有者としての彼にある。彼は自分の社会的力を、社会とのきずなも同じく、自分のポケットのなかにたずさえている。活動——その個別的な現れがどうであれ——と、活動の生産物——それがどんなものであろうと——は、つねに交換価値なのであり、交換価値とは、すべての個性、独自性が否定され、消し去られている一般性なのである(…)。

生産物の社会的形態と同じように、活動の社会的性格と生産への個人の分担(share)は、ここでは人々を統制する疎遠なもの、対象として現れる。それは、人々の相互的な関係行為としてではなく、人々に依存することなく存続し、互いに無関心な人々の衝突から生じるような関係のもとへ人々を従属させることとして現れる。人々にとっての生活条件となった活動と生産物の一般的交換——その相互的な連関——は、ここで疎遠で、自分からは独立したものとして、つまりモノとして現れる。交換価値においては、人々のあいだの社会的関連はモノとモノとの社会的関係に転化しており、人々の能力は物的豊かさに転化する。(Marx, 1973, pp. 156-157)

本質的な矛盾は、それぞれの商品において、使用価値と交換価値が、相互に排除しあいながら、同時に相互に依存しあっているということである。この二重性と内的不安定は、活動の三角形構造のすべての頂点に特徴的である。労働力それ自身がひとつの特殊な商品であるから、主体と共同体の頂点にも現れる。



レオンチェフはこの矛盾を、資本主義における活動の科学的研究にとって必要な前提条件だと考えていた。

生産手段の私的所有が優位なところでは、あらゆることが二重の側面——すなわち、人間自身の活動と彼を取り巻く対象世界——をもつことになる。

(二) 片田舎で開業している医師は、病気で苦しむ患者を減らそうと熱心に働くだろうし、そこにこそ使命を見いだすだろう。しかしながら彼は、病人の数が増えることも望まねばならない。なぜなら、彼の生活や実際に使命を全うするための機会は、それにかかっているのだから。

(三) こうした関係が意識に浸透すると、それは一般的心理構造の「崩壊」として心理にも反映されるが、人間を取り巻く世界と彼自身の生活を反映している意味 (sense) と意義 (meaning) の乖離が特徴である。(Leont'ev, 1981, pp. 254-255)

このことはレオンチェフにとって、たんに付随的なことではない。

これらの特徴を無視して心理学研究の文脈から除去することは、心理学から歴史的な具体性を奪い、心理学をもっぱら抽象的人間の、すなわち「人間一般」の心理についての科学へと変えてしまうことになる。(Leont'ev, 1981, pp. 254)

さらに言えば、それは、現実の矛盾の問題であつて、一次元的な抑圧や疎外の問題ではない。言いかえれば、資本主義的な労働活動の内部には対立する競合的な力——否定的であると同時に肯定的でもある——が存在する。

(a) それ（労働——引用者）は、活動の手段としては肯定的なものである。それは現実の富、いわば生活の「技術的な」側面である。それは、労働活動を遂行するためにもっていなければならない、知識、技能、ノウハウという富である。

(b) また、活動の疎外された特性とはまったく異なつて、まさにその活動によって生み出される新しい内容によつて生活を豊かにする条件として、労働は肯定的なものである。資本主義下の工場労働者は、自分の労働を疎外するだけでない。それと同じ仕方で、他の人々との関係にも入っていくのである。

(Leont'ev, 1981, pp. 256)

マルクスは、もっとグローバルな観点から、この肯定的な見方を指摘している。

世界市場の自立化（そのなかに個々人の活動も含まれる）は貨幣的關係（交換価値）の発展とともに増大し、またその反対も言える（…）のであるから、生産と消費における一般的きずなど全面的依存性も、消費者と生産者との相互の独立性と無関心性が増すと同時に増大する。こうした矛盾が恐慌などに導くのであるから、こうした疎外の発展と同時に、疎外それ自身の地盤の上でこの疎外を止揚しようと

する試みがなされることになる。すなわち、相場表、為替相場、書信や電信による商業従事者相互間の連絡（通信手段は当然同時に発展する）がそれであり、これらによって人々は、他のすべての人々の活動についての情報を手に入れ、それに従って彼ら自身の活動を調整しようとする。……これらすべてのことは、与えられた状況下で疎外を止揚するものではないが、古い立場を止揚する可能性を含む関係と結合とをもたらす。（Marx, 1973, pp. 160-161）

マルクスはさらに、交換価値と市場との客観的な社会的きざすが、個々人によってもたらされた歴史的産物であることを強調している。このきざすは、自己および他者からの疎外だけでなく、「個人の連関と能力の一般性と全面性をも」（Marx, 1973, p. 162）生み出す、必須の中間段階である。したがって、想像上の「原始的な豊かさ」に帰りたいと願っても、それはバカげたロマンティズムではない。

内的矛盾は外的矛盾に外への表現を見いだす。外的矛盾も、同じく現実のものではあるのだが、発生的な見地からいえば派生的なものである（Il'enkov, 1977, pp. 334-335 参照）。人間活動の分析を通して、矛盾の四つのレベルもしくは層が識別できる。これら四つのレベルは図 2・7 によって示せるが、これは図 2・6 の活動モデルを精緻化したものである。

資本主義の社会経済体制における活動の第一の矛盾は、活動の三角形の各頂点内の交換価値と使用価値の内的葛藤である。

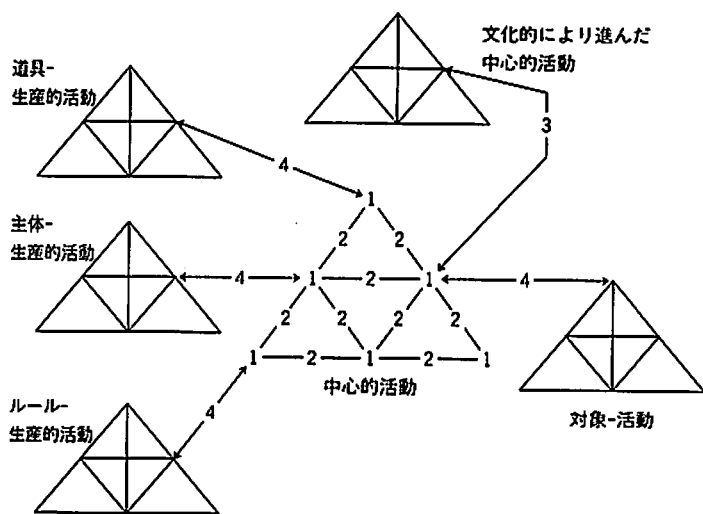


図 2・7 人間の活動システム内における矛盾の四つのレベル

- レベル 1 : 中心的活動の各々の構成要素内における第一の内的矛盾 (二重性)
- レベル 2 : 中心的活動の構成部分のあいだの第二の矛盾
- レベル 3 : 中心的活動の優位な形式の対象/動機と文化的により進んだ形式の中心的活動の対象/動機とのあいだの第三の矛盾
- レベル 4 : 中心的活動とそれらの隣接する諸活動とのあいだにある第四の矛盾

第二の矛盾は、各頂点どうしのあいだに現れる矛盾である。硬直した階層的分業が、道具の進化によって開かれた可能性を遅らせたり妨げたりするというのは、その典型例である。

第三の矛盾は、文化の体現者（たとえば教師）が、文化的により進んだ中心的活動の対象と動機を、現在優位にある中心的活動に導入するときに現れる。たとえば小学生は、友だちと遊ぶ（現在優位な動機）ために学校へ行くが、両親と教師は、真面目に勉強させようとする（文化的により進んだ動機）。文化的により進んだ対象と動機はまた、中心的活動の主体そのものによっても積極的に探し求められるだろう。

第四の矛盾は、もともとの研究対象である中心的活動とリンクしている、重要な「隣接する活動」を考慮に入れるよう要求する。

「隣接する活動」には、まず第一に、中心的活動の対象と結果をそのなかにもつ活動が含まれる（対象活動と呼ぼう）。第二に、中心的活動にとつての主要な道具を生み出す活動が含まれる（道具・生産的活動）。そのもとも一般的代表は、科学と芸術である。第三に、中心的活動の主体についての教育や学校教育のような活動が含まれる（主体・生産的活動）。第四に、行政や法制のような活動が含まれる（ルール・生産的活動）。当然ながら、「隣接する活動」にはまたこれ以外の、何らかのかわり、長期的あるいは短期的に所与の中心的活動と関係し結びつけられた他の中心的活動も含まれる。それらの活動は、互いの交換を通じて混じり合っていることもありうる。

さて、第四の矛盾は、中心的活動と隣接する活動とのあいだに、その相互作用を通じて出現する矛盾である。対象活動システムで、中心的活動の結果を「実行」する過程に現れる葛藤や抵抗は、そ

の好例である。

初期医療における医師（一般医）の活動が、四つのレベルの矛盾を例示するのに役立つだろう。

第一の矛盾、すなわち使用価値と交換価値の二重性は、医師の「中心的活動」の各頂点のどれに焦点を合わせても分析できる。たとえば、医師の仕事の道具として、多種多様な薬がある。しかし、それらはたんに有用な薬剤であるのではない。何といつても、市場に向けて製造され、利益を上げるために宣伝され販売される商品なのだ。すべての医師は、日常の意思決定において、たえずこの矛盾に直面している。

医師の仕事における典型的な第二の矛盾は、疾病の分類や正確な診断に関して伝統的に使われてきた生物医学的な概念的道具と、対象が変化するものであるということ——患者の問題も症状もしだいに相対立する側面が増え、複雑になっていくということ——とのあいだの葛藤である。こうした問題が古典的な診断や標準の学術用語に合わない、ということがますます増えている。こうした問題は、統合的な社会的・心理的・生物医学的アプローチを必要としているのだが、そのようなアプローチはまだ存在していない。

第三の矛盾は、医療システムの管理者が医師に、より全体論的で統合的な医療という理想に対応して新しい手続きを用いるように命じるときに生じる。新しい手続きが形式的に履行されても、おそらくは、それまで一般的だった旧態の活動形態に従ったままであったり、そうしたやり方からの抵抗を受けたりすることになるだろう。

全体論的で統合的な新しい原理に立つて働く医師が、患者は新しい習慣とアイデアを受け入れて生

活様式を変えるべきだ、と指示するなり提案するなりしたとしよう。患者は、抵抗という形で反応するだろう。これは、第四の矛盾の例である。ここでは、患者の生活様式、すなわち「健康行動」が対象活動である。もし患者が、その活動文脈から切り離されて、抽象的な症状や疾病として見られているのであれば、中心的活動の発展的ダイナミクスを把握することも不可能になるだろう。

矛盾とは、たんなる活動に不可避の特徴なのではない。矛盾は、「自己運動の原理であり(…)、発展がもたらされる形式である」(Il'enkov, 1977, p. 330)。これは、質的に新しい活動の段階と形式が、先行する段階や形式の矛盾を解決するものとして立ち現れるということを意味する。これは、「目に見えないブレークスルー」となつて現れる。

現実において、後に普遍的になる現象が、最初は、個人的な、特定の、特殊な現象として、あるいはルールの例外として現れるということは、しばしば起きることだ。実際、他の形では現れることはできないのである。もしそうでなかつたら、歴史は、もつと神秘的なものだっただろう。

そういうわけで、すべての労働の改善、生産活動におけるすべての新様式は、一般的に受容され承認される前にまず、それまで受容され規則化されてきた規範からの一定の逸脱として現れる。新しい形式は、労働におけるルールからの個人的例外として現れた後、他者によって引き継がれ、やがて新しい普遍的規範となる。新しい規範がこのようにして現れなければ、それは決して真に普遍的な規範となることはなく、たんに空想や願望的な思いのなかでのみ存在することになるだろう。(Il'enkov, 1982, pp. 83-

84)

この重要な結論の後で、イリエンコフはさらに、思考において、真に発達した概念は、「個人的で特殊なものから普遍的なものへの転換の弁証法という考え方を内に直接含んでいる」(Iriankov, 1982, p. 84)と指摘している。ここで、個別の行為から活動への発展に関するレオンチェフの指摘を思い出そう。レオンチェフは、「所与の具体的活動の動機と、より広い活動の動機との関係を省みること」について語っている。この種の「省察」は、実際、イリエンコフの「発展した概念」と同じことである。それらはともに、学習活動の心理学的・認識論の本質を予備的にせよ定式化している。第3章では、新しい活動の拡張的發展の継起的形式としての矛盾の分析を、さらにつまびらかにしていくことにしよう。

## 7 人間の学習の文化的進化

「学習活動」が発明されることはないし、偶然に発見されて体系的な理論的概念へと形成されることもありえない。

「学習活動」は、教育思想史の観点から、たとえば、ルネサンス時代の教育学における「自己活動」の観点から説明されるような教育学の観念を意味しているのではない。

「学習活動」は、教えるという営みや学校の組織や制度がしだいに複雑になっていくのに伴って、学校における学習から、進化的に、内在的に、発展してきたものでもない。



そうではなく、「学習活動」は、学校における学習の根本的に新しいタイプを意味しているのであり、千年にわたる学校における学習の伝統とは根本的に正反対のものなのである。(Fichtner, 1985, p. 47)

言いかえれば、学習活動という概念が構想できるのは、文化・歴史的・社会的に組織された人間の学習のなかで現在もつとも普及している形態のなかに潜在している内的矛盾を、歴史的に分析したときだけだ、ということになる。

人間の学習のもつとも原始的な形態は、主として基礎的な労働活動と分かちがたく結びついた無意識的な活動の一側面として発生した(Alt, 1975; Wilhelm, 1979)。活動理論の観点からいえば、このような偶発的な学習は、無意識的な学習操作から構成されており、日常的な共同労働への参加のなかに埋め込まれていたのである。

最初に労働活動とは区別された、知識や経験を伝達するための特別な形態が姿を現したことによって、最初の意図的な学習行為が生まれた。歴史的にもつとも初期の伝達形態には、次の三つのものがある。

ひとつめは、図2・6のいちばん上の小三角形である「生産」に位置づけられる伝達の形態である。フィッシーナー(Fichtner, 1985, p. 49)は、それを「技巧(handicraft)の伝達」と呼んでいる。これは、生産労働の直接的な文脈のなかに埋め込まれており、ひとりの人間、ひとりの徒弟へと伝達される形態である。二つめの伝達形態は、小三角形の「分配」に位置づけられる。それは、生産物を分配したり管理したり、剰余物を分配したりするときに必要な学習である。これは「権力の徒弟制」

(apprenticeship of power) と名づけられるものであり、当然、三つの伝達形態のなかではもっとも知られていない。原始的な伝達形態の三つめは、小三角形の「交換」に位置づけられる。この形態の典型は、イニシエーション儀式である。

(…)ここでは、体系的に教えるという営みは「厳しい現実」とは結びついていないし、日常の生活や労働と時間的にも空間的にもなら結びついてはいない。(…)ここでは何も生産されることはない。あるのはいかに振るまうかを演示することだけである。この「演示」は、実にさまざまな方法で行われるが、それはいつも社会的な次元における振るまいに向けられており、(…)決してひとりの人間に向けられることはなく、常にグループ全体に向けられている。(Fischer, 1985, pp. 49-50)

これら三つの初期の伝達形態は、「意識的模倣」、「意識的記憶」、「意識的試行錯誤」という学習行為を生み出した。こうした時代にも、仮説を立てて試行するというようないわゆる「高次の」認知的な行為がなかったわけではない。それはあったのだが(Leakey & Lewin, 1983, pp. 102-05 参照)、特別に学習そのものを目的とした行為としてあったのではない。それは、生産、分配、交換という営みそのものにかかわる問題を解決するための行為として付随的に発生したものであり、それらの問題を解決することを学習するための行為ではなかったのである。シンチェンコによれば、学習行為とは「主体がその行為の目的を学習の目的として意識的に自覚している」行為である。このような学習行為は(たとえそれが第一の伝達形態のときでさえ)労働活動の直接的な目的の観点から見れば、傍系

(off-line)である。まさにこのような理由から、学習行為は今日まで比較的単純なままである。複雑な反省的行為が、労働活動の例外的な状況において必要になることもあるかもしれない。しかし、初心者者をこうした例外的な学習課題で教育することはあまり合理的とは言えない。

このように考えると、人間の学習の文化的進化は、これまでとは別の方法で分析されなければならない。ひとつの独立した活動システムとして、学習が顕在化してくるための必要条件は、原始的な社会的活動タイプのなかで遂行されていた学習行為の形態そのものをたどることによって発見されるにちがいない。ここまでは、活動概念につらなる三つの理論的潮流を素描してきた。以下では、学習活動の形成につらなる実践的な潮流として、三つのタイプの活動を考察していきたい。それらは、学校教育 (school-going)、労働活動、科学・芸術活動である。

学校は、人間の学習そのものを目的として社会的に組織されている制度のなかでもっとも中心的な制度である。したがって、学校、あるいは学校教育と呼ばれるものは、学習活動発祥の場所としては、もっとも有力な候補のひとつである。

しかしその一方で、先に指摘したように、学習は本源的には基礎的な労働活動と分かちがたく結びついた無意図的な側面であった。労働現場での学習は、正規の学校教育とは相対的に異なる方法で、その独自の発達ラインを保持している。手工業的徒弟制から工場制の賃金労働への歴史的移行は、しばしば、労働から学習の潜在能力を失い排除していくものと一面的に見なされてきた。しかし最近の実践研究から、こうした見方に根源的な疑問が投げかけられている。労働活動は、学習活動が生まれるもうひとつの候補であり、さらに綿密な分析を必要としている。

学習は、真理・美を探究する活動として特徴づけられてきた。科学と芸術も、まったく同じ価値の探究に奉仕する活動とされてきた。科学・芸術と学習との違いは、一般的には次のように考えられてきた。すなわち前者は真・美を生産し、後者はそれらを再生産する、と。理想的な場合には、学習もまた本質的には、科学や芸術の生産過程を再生産するとも言われる。つまり学習は、それがもつとも優れた条件のもとにあるときには、科学的研究や芸術的創造の単純化された再現だということである。このことは、科学と芸術が学習活動発祥の、第三の候補であると考える十分な根拠になる。

### 圖第一の潮流——学校教育における学習

歴史的に早い時期の伝達形態では、まだ学校はなかった。およそ二千年という時の流れを経て、学校が、しだいに人間の学習においても優勢な組織形態になってきたことはよく知られている。ここで二つの問いが生まれる。ひとつは、なぜ、学校教育が必要になったのかという問いである。二つは、学校教育と学習活動とはどのような関係にあるのかという問いである。

学校教育の発祥を理解するために、私たちは第一の道具と第二の道具との区別という考え方に立ち返る必要がある。第二の道具——それは「獲得された技能や行為の様式を保持し伝達するさいに使用される」(ヴァルトフスキー)ものである——が特殊な表象に留まる限り、その伝達と習得は、先に述べたようなタイプの学習行為を通して実現されることもあるかもしれない。しかし、本当の一般的な第二の道具が出現するやいなや、状況は劇的に変化する。書き言葉、特に音標文字にもとづく書き言葉は、このような一般的な道具の代表である。